

5. 経緯から学び、古人の行為を今に生かす

私たちの先人は、最初のころは狩猟採取時代であったことから山地やその周辺を暮らしの場ということだったと思われ、災害や獣害から身を守って比較的自由に場を変えることも出来たと思われます。しかし、やがて平野部に定住するということになって、人口が増加し経済的にもある意味で暮らしの進化を享受することができています。

しかし、この平地というのは、ほとんどが河川や沢から生産された土砂で形成されていて、極端に言えば洪水や地震という大きな外力で形成された、地質年代的にも若い堆積物からできています。ということは地盤も岩盤のように強固ではないし、同じような災害が繰り返される環境にあるということで、土地利用上、いわば得失を備えたところであるということになります。暮らすには得が失を上回っているという評価によって立地しているということも出来ます。その失をいくらかでも小さくする工夫が、これまでのハードな対策だったようです。とはいっても、低地は水害や津波という自然災害の対象にもなっていて、長い時代の間には大きな被害があり、相当なダメージを受けたものもあります。しかし自然に対しては恐れと畏怖という考え方もあって、神社や供養塔などを建立して後世にその思いを伝えてきたようです。それは、東日本大震災の津波で、津波が到達した境界線上に多くの神社があったということや、昔からの建物や敷地を避けて土石流が拡散したということが事実としてあります。時代が古いものほど、自然災害から被害がまぬかれているということは、結果的に災害への備えを教えてくれていると思われます。

このことは、われわれは何百年あるいは千年後を見据えたとき、何が残せるのか、残すべきなのかという根幹にもなるような気がします。このような民俗学的な宗教や風土、自然信仰といったことは、近代科学的知見とまったく接点はないのが当然のように思えますが、今後も融合するというようなことはないのでしょうか。確かに科学はメカニズムを考究するもので、それを有用に活用できる技術の理論づけをするものです。一方、特定の地域や空間の多様性や個別性に関心に焦点を合わせたローカルな科学というか地域知というものがあってよいのではないのでしょうか。そして、むしろ地域の人にとっては、その地域知に関心が向かうのではないかと思います。先に述べた神社の建立などは災害で犠牲を出した地域の人でなければできなかったことであります。それが人々にとっては逆に科学へ期待する潜在力でもあり、そして外的作用にどう反応すべきかということでもあるような気がします。